

木で造った5階建てマンションが、世田谷区で着工された。構想から約10年、木造中高層ビルの普及を目指す研究者らの夢が、現実のものとなった。取り組みが広がれば、コンクリートに埋め尽くされた都会の街並みは、がらりと変わるかもしれない。



世田谷区で着工された木造5階建て住宅の模型

木造ビル 街に息吹



①表参道に木造高層ビルが建てられたら街はこんなふうになる(イメージ図、チーム・ティンパリス提供) ②木造高層建築の研究に取り組む内海彩さん(左)と小杉栄次郎さん

建物を覆うガラス越しに、格子状に組まれた木材が見える。来春の完成を目指す「下馬の集合住宅」の模型だ。世田谷区下馬六丁目の閑静な住宅街で今月末から、基礎工事にとりかかる。

高さは約十六メートル、延べ床面積は約三百七十平方メートル。店舗とする一階部分だけを鉄筋コンクリートとし、住宅にする二・五階部分は、柱など構造部分も含めてすべて木で造る。「弱いと思われがちな木ですが、構造も耐火性も厳しい基準をクリアしています」。設計した建築士の小杉栄次郎さん(左)は力を込める。木造の高層建物を建ててみたいと思ったきっかけは、二〇〇〇年の建築基準法改正だ。

大正時代に基準法の前身・市街地建築物法ができて以来、木造建物は最高で三階建てに限られていた。それが法改正で、安全性さえ満たせば高さの規制はなくなった。「新しい建物を造れるのなら挑戦したい」。小杉さんは〇一年から、大学関係者らと木造高層を可能にする研究を始めた。最大の課題だった防火性は、木を石こうボードで覆う方法でクリア。木材は国の定める耐火部材に認定された。振動・強度実験も繰り返し、鉄骨や鉄筋コンクリート造りと同様の耐震性

5階建てマンション着工 強度とデザイン性

を確保した。木の格子はデザインとして美しいだけでなく、水平方向の揺れに抵抗する役割を担っている。「二十一〜三十階でも建てられる」という。

しかし、「木造で高層建築なんてできるわけがない」という世間のイメージは強く、金融機関からの資金調達は難航した。それが、二酸化炭素(CO₂)排出削減や、木材需要の減少で人の手が入らなくなった森林の荒廃を防ぐことが叫ばれ、国も建設現場での木材利用を奨励するようになった。「下馬の集合住宅」は、国交省から総工費の二割について補助金が出た。

世界最大級の木造建築である東大寺大仏殿や、十階建てマンションに相当する高さ三十一メートルの法隆寺五重塔など、日本には木造高層の長い歴史があり、固有の景観をつくり出してきた。それが、現代はコンクリートと鉄の建物ばかりになり、海外の都市との違いが薄れた。

NPO法人化した研究グループ「チーム・ティンパリス」で小杉さんとともに活動する内海彩さん(左)は「これからは、用途によって都心でも木の建物があつていい。数が増えて価格も下がれば、木だって鉄筋、鉄骨と並ぶ選択肢となる」と話す。